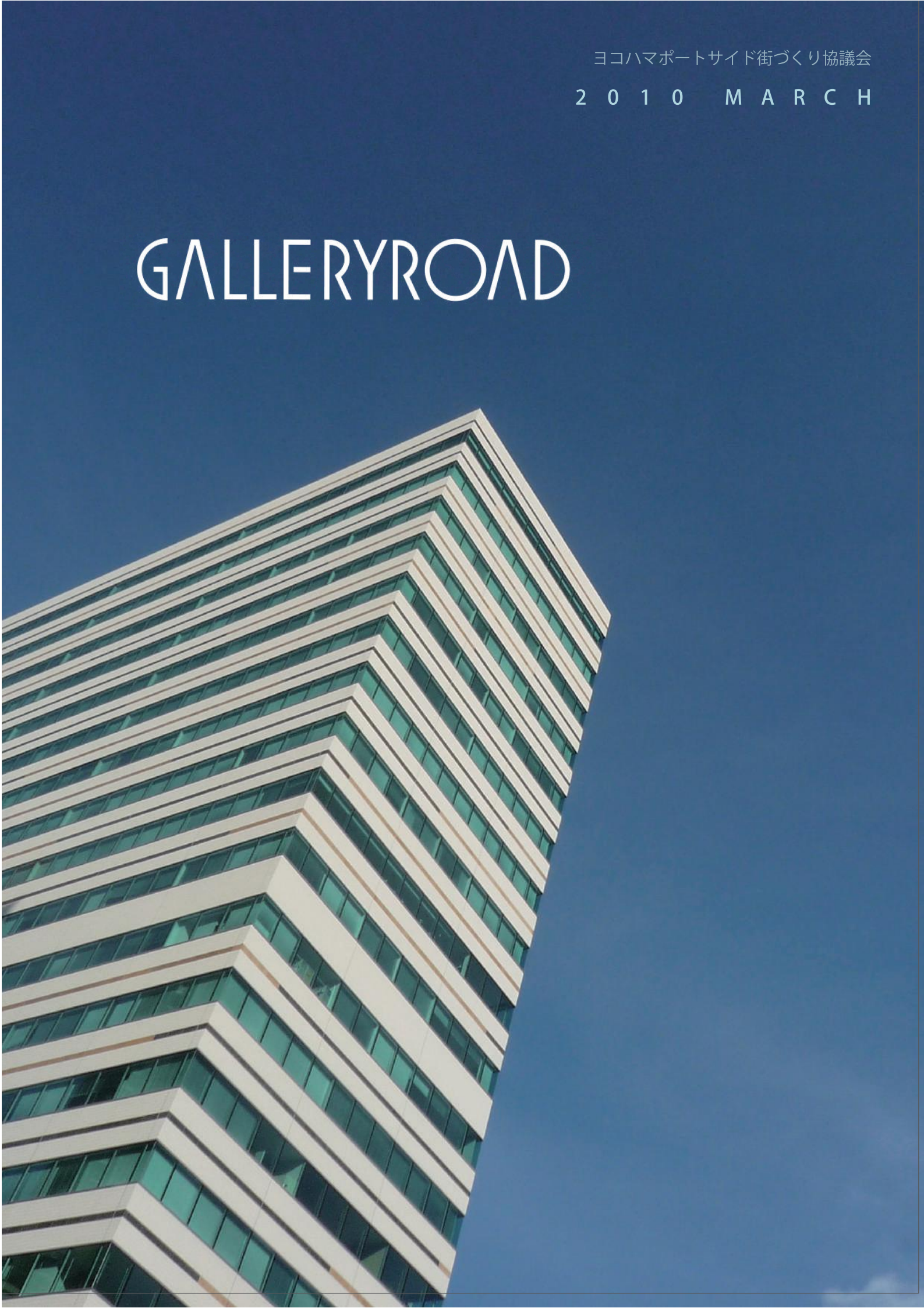
ヨコハマポートサイド街づくり協議会

2010 MARCH

GALLERYROAD



YOKOHAMA PORTSIDE

もう一歩先の　ヨコハマポートサイド　へ

ヨコハマポートサイド地区の 再開発において「アート＆デザインの街づくり」という コンセプトが掲げられたのが １９８８年の４月のことでした。今から２０年以上前の ことです。その後、９４年 には 先行 街区として E1 から E3 街区の建物が完成し、オ ープニング・セレモニーが行われました。
しかし、街にとって、２０年という時間はあっという 間の出来事でもあり、実際に人 々の暮しもまだ始まった ばかりということができます。２０１０年になると、地区内 のほとんどすべて の建物が完成しますが、人々のにとってのヨコハマポートサイド地 区は、まさにこれから。実際の暮しは始まったばかりです。

さぁ、もう一歩先のヨコハマポートサイドへ。
街づくりも　これからが " 本格始動期 " に入ります。

INDEX

ESSAy

「リソース確認からのリスタート～２１世紀のポートサイド」
松　葉　一　清　　3 ～ 6 page

Report

点在する石　岡本敦生氏の作品群について　　7 page

EvENT &

アート縁日／クリスマス＆ヴァレンタイン・コンサート
Web サイト・リニューアルについて　　8 ～ 9 page

NEW completed & open

2009 april →　2010 march

横浜ポートサイドプレイス
横浜ダイヤビルディング／横浜ベイクォーターアネックス　　10 page

YOKOHAMA PORTSIDE

「リソース確認からのリスタート～２１世紀のポートサイド」

松　葉　一　清

目前の運河のほんの数十メートル先、水面からわずか数メートルの高さに、小さな鉄橋があり、そこを石油タンクを連結した貨車が低速度で移動していく。水路にはシーバスや港湾局のパトロールのボートが行き交う。
しかし、騒音の類はほとんどなく、鉄橋で羽根休めしているカモメたちは、貨車が通過してもぴくりとも動くことがない、静けさのなによりの証明である。
春の兆しが見え始めた「ポートサイド公園」でそんな光景を目にした。２０年の歳月を経過した「横浜ポートサイド」が、観光の喧騒のなかで暮らしを営まざるを得ない他のウオーターフロントとは一味違うシナリオを生きつづけている手応えを感じさせた。まるでニューヨークの水辺に身を置いているかのような都心居住の風景。京浜工業地帯のために設けられた運河も、貨物線も、今では得難い「遺産」である。水路に工業材料を運ぶ舟の姿はなく、貨物線としてのＪＲ高島線は、石油を横浜港から鶴見の工業地帯まで輸送する「余生」を生きている。ともあれ、水路も鉄道も、その余生であるのがよい。旺盛な活動期だったら生活が脅かされたが、都市を実感させる「静かな装置」となって暮らしと共存可能だからだ。しかも、余生といっても、ニューヨークのように荒んではいない。日本の都市の水辺の「よいところ取り」が、ポートサイドには存在している。
２０年ほど前に「ポートサイド」のまちづくりが始まったとき、「アート＆デザイン」が 都市 構築の基幹のコンセプトとされた。当時は、パブリックアートの概念が、わが国に紹介されたばかりで、果たして、ここでどんなまちが造り上げられていくのか、五里霧中だった。土地バブルの崩壊に「失われた 10 年」が続き、「みなとみらい２１」も「ポートサイド」も、当初想定されたプログラムの 変 更を 余儀 なくされた。なにより、オフィス、住 宅 の 併 存（ポートサイドは、相対的に 後者の比重が重かったが）が前提だったのが、横浜のウオーターフロントは、実態としては、高層住宅街区の比重が高くなった。スタート時点での、高層の業務ビルに、現代の表現者によるパブリックアートが彩りを添えるという新都市の姿は画餅に終わった。
２０１０年を迎えて「アート＆デザイン」の思考をどう位置づけ、今後の「ポートサイド」をさらに豊かな場にしていくための発想の転換が求められている。わたし個人としても、まちづくりの初期プログラムの設定に関わり、しばらくの中断のあと、アートとデザインのための「公的 信託」の助成 運営に携わってきた立場から、新たなあるべき姿を模索しなければならないと強く考えるに至った。
バブルの時代のような 発想は 排除すべきだし、「コンクリートからひとへ」といったスローガンが喧伝されるなかで、より現実に即した発想転換が求められる。それもあって、久しぶりにポートサイドを時間をかけて歩き、「成熟」の 度合いを 確かめようとした。そして、冒頭の「ポートサイド公園」の光景に行き当たった。

「リソース」という 言葉を、わたしは いつも、まちづくりの現場で使ってきた。つまり、そのまちの「資源」であり、「原資」である。都市 構築の システムが合議的な経過たどり、また、限られた専門家の手に委ねられてしまっている わが国にあって、都市づくりに際して、「資源」は有効 活用されないままに来てしまった。「埋もれた資源」というが、自分たちのまちに、一体、どれだけの文化的な資産があって、また、それを活用できる人材がどこにどれだけ存在するのか、十分に検討されないまま、私権の調整に多大な時間と労力が割かれ、まち開きの時点で成熟のためのエネルギーは残されてこなかった。その結果、あちこちに誰のものでもない愛着の持てない新都市が出現してしまうのである。それを回避するため、まちづくりに着手した時点で、どれだけの活用できる、人材も含めた「資産」があるかを把握することこそ、なにより重要だと、わたしは考えてきた。
横浜には重層的な歴史・文化資産がある。しかし、ふんだんなのは 旧市街地であって、「ポートサイド」や「みなとみらい２１」のようなウオーターフロントとなると話は別だ。それこそ米国のように、１９７０年代以前は、新開発・再開発にあたっては「じゃまもの」と思われてきた産業関係の施設の「残骸」をどう活用するかが、都

市づくりのひとつの成否の鍵となる。横浜でいうと放置された倉庫が蘇った「赤れんが倉庫」が相当する。
もっとも、「ポートサイド」の開発が 始まったとき、新港埠頭の「赤レンガ倉庫」は 文化財として意識されていたが、「ポートサイド」の地区内に残る冒頭に 触れた 高島線は、都市づくりの資産になる と 想定されていなかった。当時の 社会を思い返すと、廃モーテルなどを「心霊空間」と持て囃し、肝試しで訪ねる若者たちが出現していたが、それは「蛮行」として 眉を顰めさせた 。
今日の「廃墟巡礼」や「工場萌え」「コンビナート萌え」をブーム と呼ぶような肯定的な認知は、まだ存在しなかった。
その意味では、１９９２年の公開設計競技（コンペ）を経て建設された「ポートサイド公園」が、先に述べたようにこのまちを取り巻く貨物線や水辺を堪能するための「絶好の見物場所」として機能することは、あまり予見されていなかった。
１７１人の応募者から選ばれた設計者の長谷川浩己氏が、米国のランドスケープデザインの事務所で実践を重ねた経歴の持ち主なのは認識されていたにしても、である。完成から２０年近い歳月を経て、改めて公園を子細に眺めてみると、そこが周辺の都市資源を「ポートサイド」の環境に取り込む秀逸な装置であるとともに、ごく近年の現代建築の環境志向をずいぶんと早い時期に先取りしていたことに驚かされる。それだからこそ「リソース」は生かされ、公園そのものが今やこのまちの最大の「リソース」として機能しているわけだ。

水辺に沿って伸びる４００mのプロムナードには、鋭角の三角形のウッドデッキが６カ所、水辺に飛び出すように設営されている。デッキの足元には、水生植物の葦が生い茂り人工環境のなかでの生命力を誇示している。そして、その自然を意識して長谷川氏が配した人工物は、環境に溶け込む柔軟さを備えている。デッキの手すりは細いステンレスの丸棒とワイヤーを組み合わせた繊細なもので、先端に発光ダイオードが仕込まれた、これも細い白い塗装のポールがデッキに添うように配された。このポールは、プロムナード全体では数十本にものぼる。
その光景を見て、パリの原始博物館「ケ・ブランリー」の姿を思い浮かべた。ジャン・ヌーベルのコンペ当選案は、セーヌ河岸（博 物 館 の 名称は〈ブランリーの岸辺〉の意）の立地を意識して、繁茂する葦原の向こうに、透過性の高い外壁に囲まれた博物館の躯体が見え隠れする姿が描かれていた。いわばエコロジーとデジタル環境の金的を一挙両得で貫き通す秀逸さは、他の応募案を圧倒していた。完成後まだ歳月を経ていないが、ヌーベルの想定通り、葦は生い茂りつつあり、そこに散りばめられたポールの発光ダイオードがクールな青い光を放つ光景は２１世紀の都市のランドスケープを感じさせる。
その「ケ・ブランリー」に１０年以上も先立つ 時期に、葦と繊細な 金属構築物、そして発光体という構成を実現していた「ポートサイド公園」は、「２１世 紀 のラ

ンドスケープ」を先取りしていた。高品質な空間は、歳月を経て、古びるどころか、現在になって秘めていた「リソースの底力」を発揮し始めたと受け止めるべきだろう。
セーヌのブランリー岸には、貨物線も、足下の近距離の水辺もない。米国で修練を積んだ長谷川氏は、産業構造の転換が生み出した水辺開発への対応において一日の長があった。価値観の変化が急速な時代に、古びることのない空間をもたらした長谷川氏に感謝すべきだろう。そして、繰り返すが、この公園が「ポートサイド」のまちづくりのキー・コンセプトである「アート＆デザイン」の最大のリソースとなっていることを再認識して、これからのまちの成熟に臨むべきだと考える。

実 のところ、「アート＆ デザイン」を 暮らしの場にどう生かすか、議論は 未成熟なまま現在まで来てしまったのは否めない。もはや、新たな パブリックアートを十分な討議なしに、「上から目線」で配するべき でないの は自明 の理だ。それより、「ポートサイド公園」が象徴的なように、ここまでに設営を終えた「リソース」をきっちり維持管理して尊重しながら、定着した「ポートサイド」の暮らしと、当初のコンセプトとの調整が不可欠と思われる。それは、ここに住むひとびと、ウィーク デーに 働くひとびとに、「リソース」を存分に活用してもらうことから始まるだろう。
「横浜クリエーション・スクエア（ＹＣＳ）」のアトリウムに、平日のお昼すぎに足を運ぶと、お弁当持参の働く女性のグループがにぎやかに語り合いながら、楽しげに昼食をとっている。アトリウムのドリンクスタンドも活用されているようで、好もしい印象を抱いた。このアトリウムのような無償、あるいはわずかの出費で活用できる都心ならではの空間の活用が、まちを定着させ、成熟させる第一歩だと思う。

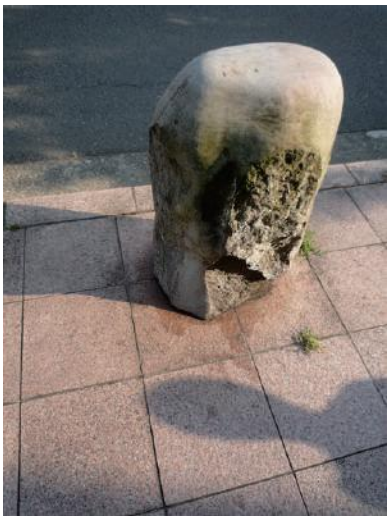
ニューヨークのウオーターフロントの代表格、バッテリー・パークシティの「ウインターガーデン」と呼ばれるガラスの天蓋を持つアトリウムは「公共に開かれた空間」として愛され、そこでノートパソコン を 開く男女の姿がいつも 見られる。しかし、彼 らの 文化に「お弁当」はなく、せいぜいがシアトル・コーヒー片手である。
これに対して、ＹＣＳのアトリウムでは、食卓を囲む歓談が、ここならではの和気あいあいの雰囲気を醸し出している。

このアトリウムも、「アート＆デザイン」のコンセプトに基づいて実現した「リソース」だ。それが十分に活用されたとき、心温まる都市の風景が産み落とされる。萎縮しがちな世相のなかで、自分たちの暮らしを豊かにする手段として、「アート＆デザイン」の コンセプトで 開発当初に構築された数々の「リソース」を認識し直し、今後に生かす方策を、わたしたち専門家も再構築せねばなるまい。

ポスト・モダンの旗手として世界の建築デザインの 方向転換 の 舵取りをした マイケル・グレイブス氏の設計による高層住宅「アルテ横浜」（１９９２年）、そのグレイブス氏が以後のまちづくりの色彩計画の指標として残した「ソフトバンクＩＤＣ 横浜 データセンター」（１９８９年）のタイル壁画「ＴＨＥ　ＷＩＮＤＯＷ」、Ｅ２街区の角地の広場に立つ、やはりポスト・モダンのデザイン運動の世界的な主導者だったエットーレ・ソットサス 氏 の 屋 外彫 刻「ＴＨＥ ＦＡＭＩＬＹ」など、「ポートサイド」は、手がかりになる「リソース」に事欠かない。
それらは、リニューアルされて情報量の増えた「ヨコハマ ポートサイド 街づくり協議会」のウェブ (http ://www.portside.ne.jp) で 由来 などがいつでも確認できるようになった。それもまた住民のレベルでの活用への力強い援軍となるだろう。
知名度が「全国区」となった「アート縁日」は「ポートサイド公園」を会場に 今年は １７年目に突入する。まちを舞台にした営みはまちづくりの一環として着実に展開されている。
それがソフトだとするなら、その活動の下支えとして、ハードの「リソース」を、いま一度、価値認識も含めて総点検する時期に差しかかっている。

点在する石

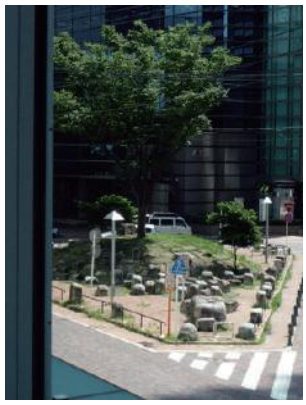
ギャラリーロード沿いに
点在する「石」のオブジェ…
生地の石材ですから、そんなに
派手やかに存在感を示している
ものではありませんが、
人口的にデザインされた
空間の中で
自然な触感を残した
石材たちは、
ある種、独特の存在感を
示すものでもあります。



ギャラリーロード沿いに点在しているは、現在もランドマークタワーに「ドックヤードガーデン」として継承保存されている「旧三菱重工横浜船渠第２号ドック」と同じ石造りのドックに使用されていた石材です。石の彫刻家　岡本敦生さんがプロデュースされたパブリック・アートの作品群です。
この石材は、明治３０年代に伊豆半島から切り出されたもの（新小松石）で、全て手彫りで加工されたものです。岡本さんは、そうした先人たちの足跡を残すため、あえて旧来の加工面を残し、ご自身の表現と調和させた計画を提案されました。

そして、このギャラリーロード沿いにあるこの作品群と、横浜クリエーションスクエア脇にある「金港公園」、ザ・ヨコハマタワーズ中央にある広場に設置された作品「dockyard - 記憶体積」は、いずれも、岡本さんが、同じ三菱重工ドックの旧材を用いて　つくられた作品です。近代化とともに、横浜港で時を刻み付けてきた石材が、この街で,舗道に設置されていたり、あるいは公園になっていたり、様々な形で人々の生活と触れ合いながら、ヨコハマポートサイド地区でまた新しい時を刻んでいく…

作品たちは、地区の歴史と共鳴しながら時を刻み続けています。



金港公園

dockyard- 記憶体積

松葉一清

Kazukiyo Matsuba

３０年以上にわたり、専門誌、学術誌一般誌など多彩なフィールドで、都市と 建築、さらに 都市文化 全般にわたる論考を行なってきた。
また、朝日新聞 編集委員として、同領域の 社会的な課題の論考 を 連載しポ スト・モダンをはじめ 建築論の先導役として活躍した。
現 在、武蔵野美術大学教授（造形文化・美学美術史）。また、長年に渡り、公益信託基金 ヨコハマポートサイドまちづくりトラストの運営委員を務めている。

主な著作に『日本のポスト・モダニズム』三省堂、'84年。『帝都復興せり!―「建築の東京」を歩く 1986 ―1997』朝日文庫、'97年。『 モール、コンビニ、ソーホー　デジタル 化がもたらすポピュリズム』NTT出版、'02年。

アート縁日18

ART-ENNICHI 2009

すでに地区内の風物詩となっている「アート縁日」。
１８回めを迎えた平成２１年度の開催は、１０月１０日と１１日、いつものように土曜日と日曜日の２日間、開催されました。概ね天気は腫れ。むしろ快晴に近かったかもしれません。会場にはたくさんのご家族連れのお客様が来場していただきました。お子様もたくさん来場していただき、元気な笑い声を響かせてくれました（ご家族連れ、特にお子さんの来場が多いのが、アート縁日の特徴でもあります）出展作家さんたちも、お子様向けの作品をつくる方も多く、毎年の出展を楽しみに「毎年、作品を購入してコレクションしているんだ」という声も聞こえます。

TR210 佐藤てるみさんのブース

ヨコハマポートサイド地区も、ようやく平成２２年度までに、地区内のほとんどすべての建物が完成します。しかし、まだ産声をあげてから１５年余の街で、人々の暮らしは、まだはじまったばかりだということもできます。
そのなかで、アート縁日は当初より「まちまつり」になれるようにと開催を続けてきましたが、これからのアート縁日は、もっと街の生活にとけ込めるように、また、ほっと一息できるような空間、雰囲気といったものを提供できるイベントになっていけるよう、確実な一歩を、また重ねてゆきたいと考えています。

今年度アート縁日大賞　各賞受賞者のみなさん

アート縁日大賞　TR210　佐藤てるみさん
アート縁日賞　横浜まるまる堂　菅野則子さん
　　ハヘロ　谷本礼文さん
入　賞　CHEESE&TACOS　高見沢ちづるさん
　　Anjesroom　有山彩乃さん／里　山さん
　　REPLY タケナカミノルさん
　　手紙工房 津村満治さん
　　happa do　畑山葉子さん

■　入場者数　　約３８，０００人

A Little Bit Concert vol.2

Valentine Concert

at Restaurant Clicks

A Little Bit Consert　開催される

新しい試みとして、地区内の施設や飲食店を会場にした
小さなコンサート「A Little Bit Consert」を開催させていただきました。
第１回は平成２１年１２月１９日「クリスマス・コンサート」と銘打って、
第２回は「バレンタイン・コンサート」と銘打って平成２２年２月１２日に
挙行させていただきました。ともに演奏の中心となっていただいたのは
ハーモニカ奏者の大竹英二さん。ドイツで開催された国際ハーモニカコンテストで、
日本人としては史上２人目のハーモニカ世界チャンピオンとなった方です。
第１回はソロでの演奏、第２回はハーモニカ、ギター、アルパによるトリオの演奏でした (ギター＝丸山史朗さん、アルパ＝藤枝貴子さん）いて開催されました。

街角を会場に

会場になったのは、第１回は神奈川公園内にある横浜市の幸ヶ谷集会所。第２回目はレストラン・クリックス。神奈川トヨタ myX ビルの地階にあるレストランです。
ともにヨコハマポートサイド地区の日常的な暮しのなかにある、日頃からおなじみの施設です。
こうした場所にスポットを当てて、今後とも、
小さなコンサート「A Little Bit Consert」を続けさせていただきたいと思っております。

２００９年　ヨコハマポートサイド街づくり協議会
ウェブサイト　リニューアルしました

２００９年８月、ヨコハマポートサイド街づくり協議会 公式ウェブサイト（ホームページ）をリニューアル いたしました。
「アート＆デザインの街づくり」を中心に、これまでの地区の歩みを簡単にふりかえりながら、これまでに発行してきた 地区広報誌「ギャラリーロード」の総目次集 など「アーカイブ」としての機能を充実させせました。また、地区へのアクセス・ガイド 、建物ガイド や 利便施設の紹介など「地区の今」を 伝える便利マップとしての機能も充実させせました。ぜひ、ご利用くださいますよう。

ウェブサイト　アドレス　http://www.portside.ne.jp/

YOKOHAMA PORTSIDE

NEW
COMER

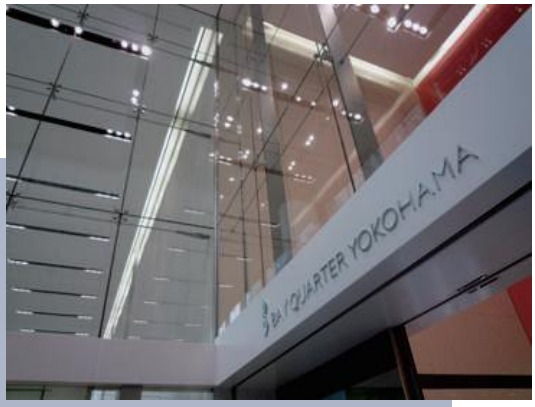
2009 April
→ 2010 March

C-3 街区
横浜ポートサイドプレイス
タワーレジデンス

地上２９階、地下１階、高さ約１００m、マンションを中心にした建物です。竣工は２００９年の１１月。ヨコハマポートサイド地区では最も南側に立つ建物で、ポートサイド公園に面して海辺の空間に立つ、おだやかな佇まいの建物です。パブリック・アート群も充実しており「街をもっと楽しむためのアート」をコンセプトに、スペインのジョセップ・マリア・マルティンさんや、長谷川仁さんの作品が、展示されています。いずれの作品も住民参加型のワークショップが開催され、アーティストの方と街のみなさんとのコラボレーションによって制作されました。

A-3 街区
横浜ダイヤビルディング (横浜ベイクォーターアネックス)

２０１０年３月、すでに「ナビューレ横浜」という住宅棟、「横浜ベイクォーター」という商業施設が完成している A-3 街区に、新たに「横浜ダイヤビルディング」がオープンしました。
地上３１階、地下２階、高さ約１４７m の建物に、オフィスと「横浜ベイクォーターアネックス」という商業施設が入居しています（横浜ベイクォーターアネックスは、この建物の３～６階に入居)。女性や子育て世帯、２０代～４０代ファミリーを メインターゲットとし、日本初出店 1 店舗、神奈川県初出店 10 店舗を含む、物販 21 店、飲食 2 店などのテナントが出店しています。



YOKOHAMA PORTSIDE

街づくり協議会　会員企業及び団体

株式会社 大塚商会
株式会社 加藤美蜂園本舗
神奈川トヨタ自動車 株式会社
菱重エステート 株式会社
京急開発 株式会社
京急不動産 株式会社
株式会社 相鉄アーバンクリエイツ
中外倉庫運輸 株式会社
トーヨーカネツ 株式会社
独立行政法人 都市再生機構
ソフトバンクテレコム 株式会社
畠山物産 株式会社
三井不動産 株式会社
三菱重工業　株式会社
三菱倉庫　株式会社
ハドソンジャパン 株式会社
財団法人 横浜市建築助成公社
横浜市住宅供給公社
株式会社 ランドビジネス
横浜市

YOKOHAMA PORTSIDE

2010 MARCH

発行　ヨコハマポートサイド街づくり協議会

編集　ヨコハマポートサイド街づくり協議会　アート＆デザイン・コーディネーター事務局

Phone 045-243-2013